

山口蓬春記念館

年 報

第一号 平成29~30年度

Vol.1 HOSHUN YAMAGUCHI MEMORIAL HALL

H O S H U N



Y A M A G U C H I

目次

『山口蓬春記念館 年報』の発行について	01
I. 展示及び活動イベント等の概要(平成29～30年度)	02
II. 収蔵品修復(東洋絵画)	12
III. 収蔵品修復(油彩画)	13
IV. 収蔵品保存対策	15
V. 新収蔵品	16
VI. 収蔵資料の電子データ化	17
VII. 刊行物の発行(平成29～30年度)	19

『山口蓬春記念館 年報』の発行について

当館では、平成10年度（1998）以降、『山口蓬春記念館 研究紀要』を発行し、美術品等の収集、保管及び展示並びにこれらに関する調査研究の成果を発表してまいりました。

博物館の活動記録ともいえる年報情報も、紀要の紙面上に公開をしてきました。特に、研究紀要は、その性質上、美術館・博物館等が主な配布先であったことから、広範囲への公開を行っておりませんでした。

今回、平成30年度（2018）発行の『研究紀要第9号』より、研究紀要は調査研究を中心とした印刷刊行物、年報についてはウェブ上で閲覧者の全ての方々に公開可能とし、それぞれの掲載内容に適った情報を発信することといたしました。

この度、発行いたします『山口蓬春記念館 年報 第一号』は当館のホームページ上に掲載し、当館の活動経緯を広く発信してまいります。

ご理解を賜りたく、ここにご挨拶申し上げます。

令和元年（2019）6月 山口蓬春記念館

H O S H U N

YAMAGUCHI

I. 展示及び関連イベント等の概要（平成29～30年度）

山口蓬春記念館では、平成29年度から平成30年度の展示及び関連イベント等のうち、各年5回の展覧会を開催した。両年度ともにそのうちの2回を企画展とし、当館所蔵以外の作品も他館から借用して展示したほか、平成30年2月にはNHK日曜美術館にて山口蓬春が取り上げられるなど多くのご来館者をお迎えした。

※名称等の表記については、開催時の呼称をもとに若干の修正を加えた。

平成29年度

■ 春季企画展

蓬春モダニズムとその展開 - 創造と変革 -

平成29年3月25日(土)～6月4日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

- 前期：3月25日(土)～4月30日(日)
- 後期：5月2日(火)～6月4日(日)
- 後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
- 開館日数：65日

山口蓬春（1893 - 1971）は、東京美術学校日本画科を卒業後、伝統的な技法を基盤として古今東西の芸術を吸収し、新しい日本画の創造に邁進してゆく。

戦後の昭和22年（1947）、明るい陽光があふれる葉山の地に転居した蓬春の作風は、東洋画の素養を基に西欧美術のエスプリを多分に取り入れながら、明るく近代的な画風が顕著となる。それは「蓬春モダニズム」と称され、戦前から蓬春が取り組んできた新日本画創造の一つの成果と評される。

昭和28年（1953）には親友・吉田五十八（1894 - 1974）設計で蓬春の人柄を表したような明るくモダンな画室も完成し、蓬春モダニズムが一つの到達点に達した充実した時代であった。

本展では「蓬春モダニズム」とされる作品群のうち、マティスをはじめフランス近代絵画の理知的な造形感覚が日本画の画材により結実し、精神性をも色濃く表した傑作《榻上の花》（昭和24年 [1949]）を展示した。

さらに「蓬春モダニズム」に続く昭和30年（1955）以降、対象に内在する美を追求した《まり藻と花》（昭和30年 [1955]）、花鳥画の伝統から脱却し近代的な感性と知性により生み出された《霜》（昭和35年 [1960]）、《飛鴨図》（昭和42年 [1967]）など「清澄な美」に至る過程を辿った。

本展では蓬春芸術の創造とたゆみなき変革をご覧いただいた。なお《霜》、《飛鴨図》は当館初公開となった。



チラシ
山口蓬春
《榻上の花》《霜》（部分）

主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
榻上の花	山口蓬春(1893-1971)	昭和24年(1949)	紙本着色	東京国立近代美術館
霜	山口蓬春	昭和35年(1960)	紙本着色	個人
飛鴨図	山口蓬春	昭和42年(1967)	紙本着色	個人
山湖 小下図	山口蓬春	昭和22年(1947)	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩	山口蓬春記念館
計志	山口蓬春	昭和25年(1950)	紙本着色	山口蓬春記念館
画室にて	山口蓬春	不詳	紙、鉛筆	山口蓬春記念館
望郷 小下絵	山口蓬春	昭和28年(1953)	紙本着色	山口蓬春記念館
まり藻と花	山口蓬春	昭和30年(1955)	紙本着色	山口蓬春記念館
白蓮木蓮	山口蓬春	昭和32年(1957)	紙本着色	山口蓬春記念館

関連イベント

● 第14回児童・生徒のための美術に親しむ教室

「岩絵具を使って絵を描こう」

日時：5月6日(土) 13:00 - 16:00

会場：多目的室

講師：高橋朋子(東京都立総合芸術高等学校美術科講師)

参加人数：19名(応募者21名)

● 「国際博物館の日」来館者プレゼント

日時：5月18日(木)

● 展示解説

日時：会期中の毎週日曜日 14:00 - (約20分)

参加人数：3月26日1名、4月2日0名・9日0名・16日4名・23日0名・30日1名、5月7日0名・14日0名・21日0名・28日2名、6月4日0名

■ 夏季収蔵品展

山口蓬春の日本画と写生 - 花・その煌めきを描くころ -

平成29年6月10日(土)～9月24日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前 期】：6月10日(土)～7月23日(日)
 【後 期】：8月8日(火)～9月24日(日)
 【後 援】：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
 【開館日数】：80日

自然風物、それも草花の華やかさは、身近な美の対象として生活のなかに彩りを添えるだけでなく、伝統絵画のなかにも描きとめられてきた。元来、中国よりもたらされた花鳥画は、やがて日本の四季折々の風土のなか、日本人の美に対する豊かな表現と共に発展をとげ、見る人々の心に愛しみ慕われてきた。日本画家・山口蓬春(1893-1971)は、自身の絵のモチーフとするために、四季折々にあわせ多くの草花を庭園に育てている。野鳥も訪れる旧山口邸の閑かな佇まいのなか、在りし日の蓬春は庭園で季節の風を感じながら草花を写生し、それら遺された作品群から蓬春の自然を愛でる気持ちを垣間見ることができる。

「花鳥畫の、作品の優劣は、その作家の自然への愛の深さと、観察の力の如何とのみが決定的と謂っていい。」(山口蓬春「花鳥畫を描く心」『邦畫』4月号、昭和10年[1935]より)

本展では、蓬春が描いた草花の日本画や写生を中心に展示し、かれが愛でた四季の花々のその煌びやかな世界を紹介した。



チラシ
山口蓬春《夏の花》(部分)

■ 主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法
夏の花	山口蓬春(1893-1971)	昭和45年(1970)	紙本着色
春野	山口蓬春	昭和6年(1931)	紙本着色
紅梅	山口蓬春	昭和12年(1937)	紙本着色
泰山木	山口蓬春	昭和14年(1939)	絹本着色
紫陽花	山口蓬春	昭和34年(1959)	紙本着色
静物(遼三彩鉢と果物)	山口蓬春	昭和31年(1956)	紙本着色
洋梨 写生	山口蓬春	不詳	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩
浄雪	山口蓬春	大正15年(1926)	絹本着色
三宝柑 写生	山口蓬春	昭和12年(1937)	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩

※出品作は全て当館所蔵。

■ 関連イベント

- 第51回 葉山特別見学会
 日 時：7月6日(木) 9:30 - 14:30
 場 所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館
 参加人数：38名(応募者60名)
- 夏休み親子鑑賞期間割引
 期 間：8月8日(火)～31日(木)

● 展示解説

日 時：会期中の毎週日曜日 14:00 - (約20分)
 参加人数：6月11日0名・18日0名・25日0名、7月9日0名・16日2名・23日0名、8月13日0名・20日0名・27日0名、9月3日0名・10日0名・17日0名・24日4名

■ 秋季企画展

水、その生命の源を描く - 山口蓬春の眼差しと表現 -

平成29年9月30日(土)～11月26日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前 期：9月30日(土)～10月22日(日)
【後 期：10月24日(火)～11月26日(日)
【後 援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
【開館日数：50日

北海道・松前に生まれた山口蓬春(1893-1971)の生家は、松前城二の丸跡にあった。その生家から臨む津軽海峡の景色はその後の原風景となったのだろうか。戦後、葉山に移り住んだ蓬春は、邸宅から眼下に海を見下ろすこの葉山一色の地で数々の名作を創造しながらその生涯を終えた。

「今、住んでいる所が、湘南の海村なので此頃の画材の多くは殆ど現在の環境からとっています。」(山口蓬春「夏の印象」『三彩』第48号、昭和25年[1950])

そう蓬春が語るように、この頃から魚や貝といった海をイメージさせる作品を多く描くようになる。時にアイオン台風を二階の旧画室の窓から身を乗り出すようにして描いた《濤》や海辺の景色を描いた《夏の印象》など、陽光溢れる葉山の海を通じて蓬春は、西洋の近代絵画の技法を取り入れた、これまでにない新しい日本画の表現となる「蓬春モダニズム」と呼ばれる作品を生み出していった。

海は、生命の源であり、「水」から成る。「水」は、雨となって天から降り注ぎ、湖を創り、滝となって山河を下り、また海へと還ってゆく――。四方を海に囲まれ、水源豊富な日本において、「水」は身近な自然の形態であり、また四季の織り成す風情として日本人の感性を刺激し、蓬春のみならず古来より絵画のモチーフとして取り入れられてきた。戦前より《緑庭》や《鯉》など「水」をモチーフにした作品を数多く描いていた蓬春だが、何れも自然に対する真摯な眼差しを窺うことができる。

本展では、蓬春の描く「水」の表現に注目し、水をめぐる軌跡を辿りながら戦前、戦後を通じた蓬春の画業の変遷を探った。



チラシ
山口蓬春《緑庭》

■ 主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
緑庭	山口蓬春(1893-1971)	昭和2年(1927)	絹本着色	山口蓬春記念館
鯉	山口蓬春	昭和14年(1939)	紙本着色	葉山町
濤	山口蓬春	昭和23年(1948)	紙本着色	東京国立近代美術館
夏の印象	山口蓬春	昭和25年(1950)	紙本着色	個人
夏	山口蓬春	昭和40年(1965)	紙本着色	東京国立近代美術館
海辺華	山口蓬春	不詳	紙本着色	株式会社ヤマタネ

■ 関連イベント

- 葉山しおさい博物館×山口蓬春記念館 邸園探訪クイズラリー
期 間：10月1日(日)～11月26日(日)
場 所：葉山しおさい博物館および当館
参加人数：46名
- 邸園ツアー
日 時：10月8日(日) 11:00 - 11:40
会 場：本館および庭園
参加人数：12名
- 山口蓬春生誕日特別企画 ギャラリートーク「美術を科学する」
日 時：10月15日(日) 14:00 - 15:00

会 場：多目的室および展示室
解 説 者：倉持卓司(葉山しおさい博物館学芸員)、当館学芸員
参加人数：5名

- 呈茶会
日 時：11月18日(土)、19日(日) 12:00 - 15:30
会 場：桔梗の間および茶の間
料 金：1席500円(お菓子付き、要別途入館料)
協 力：葉山町茶道連盟
参加人数：18日25名、19日24名

- 展示解説
日 時：9月30日(土) 14:00 - (約20分)
参加人数：0名

■ 初冬収蔵品展

めでたきは蓬春邸 – 縁起物・吉祥文の魅力 –

平成29年12月2日(土)～平成30年2月4日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前期】：12月2日(土)～1月8日(月・祝)
 【後期】：1月10日(水)～2月4日(日)
 【後援】：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
 【開館日数】：51日

「めでたきは光琳の絵。」

そういう古人の言葉を知っていた蓬春は、大好きな尾形光琳の《飛鴨図》を毎年新春の床の間に飾ってはその美を楽しんでいたという。新たな年を迎える本展では、幸福への願いを込めた「めでたさ」をテーマに展覧会を開催した。

さまざまな美術品のなかでもとりわけ人気が高く、親しまれてきたのは吉祥文といえるだろう。「吉祥」とはめでたい、よいことの兆しと意味されている通り、その表し方は、国や地方によって多様だが、日本では工芸全般に大きな影響を受けた中国の吉祥文と関係のあるものが多くある。また画題としても好まれ、縁起のよい動植物を描いたほか、語呂や発音が吉祥語と通じることなどから験担ぎをした。そこには、長寿、繁栄、成功などを願い、それぞれに託した人々の、今も昔も変わらぬありのままの姿を垣間見ることができる。

本展では、蓬春作品を吉祥的な視点で眺めることで身近にありながらも意外な「めでたさ」を再発見していただくとともに、蓬春が愛蔵した日本・中国・朝鮮の絵画や陶磁器などを通して吉祥文に込められた意味を紹介した。



チラシ
 伝雪舟等楊
 《円窓 白菊芙蓉図》
 尾形光琳
 《飛鴨図》(部分)
 山口蓬春
 《雙花》(部分)
 《「狗子図」模写》(部分)
 《古赤絵獅子唐草文平鉢》

主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法
円窓 白菊芙蓉図	伝雪舟等楊(1420-1506)	室町時代(15世紀)	紙本着色
飛鴨図	尾形光琳(1658-1716)	江戸時代(18世紀)	紙本着色
富嶽図	富岡鉄斎(1837-1924)	大正4年(1915)頃	紙本着色
雙花	山口蓬春(1893-1971)	昭和12年(1937)	紙本着色
扇面流し	山口蓬春	昭和5年(1930)	紙本着色
茄子	山口蓬春	昭和24年(1949)	紙本着色
狗子図 模写	山口蓬春	不詳	紙本着色
石榴	山口蓬春	不詳	紙本着色
加彩鷹匠俑	中国	唐時代(7-8世紀)	陶器
古赤絵獅子唐草文平鉢	中国・景德鎮窯	明時代(16-17世紀)	磁器

※出品作は全て当館所蔵。

関連イベント

- 鎌倉市鐮木清方記念美術館との連携イベント
 期間：12月2日(土)～2月25日(日)

①ワークシート「鐮木清方と山口蓬春 – 吉田五十八建築にみる日本画家の画室」配布

②対談イベント「蓬春と葉山の見どころ」
 日時：1月6日(土) 13:30 – 14:00
 会場：鎌倉市鐮木清方記念美術館
 ゲスト：当館学芸員
 参加人数：12名

③対談イベント「清方と蓬春の交流と共通点」
 日時：2月3日(土) 13:30 – 14:00

会場：多目的室
 ゲスト：今西彩子(鎌倉市鐮木清方記念美術館学芸員)
 参加人数：8名

④オリジナルグッズプレゼント(限定50名)

● 邸園ツアー
 日時：12月9日(土) 11:00 – 11:40
 会場：本館および庭園
 参加人数：14名

● 展示解説
 日時：1月13日(土) 14:00 – (約20分)
 参加人数：2名

■ 新春収蔵品展

山口蓬春とお茶 - 蓬春邸にみる茶の湯のころ -

平成30年2月10日(土)~4月8日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前 期：2月10日(土)~3月11日(日)
【後 期：3月13日(火)~4月8日(日)
【後 援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
【開館日数：50日

「茶の湯」とは、いうまでもなく日本独自に育まれた伝統文化。それは一服のお茶を楽しむために、茶室や庭などの空間をととのえ、絵画や花を飾り鑑賞する工夫を凝らし、客人を心地よくもてなすための作法が融合した総合芸術をさす。

日本画家・山口蓬春(1893-1971)は作家として駆け出しの頃から古美術品を求め自らの芸術の糧とし、自ら培った審美眼をもって当時の文化人たちとともに茶の湯を楽しんでいた。一方、妻の春子は元・日本画家であったが、結婚後は蓬春を支えるため絵を描かなかった。そして武者小路千家の茶道を心得るなど、豊かで教養に溢れた彼女は日ごろより茶の湯のころを以て、多忙な生活を極めていた蓬春の客人を歓待した。

このような二人は葉山の邸宅に、茶の湯をたのしむための水屋や露地のある坪庭などの心地よい空間をととのえた。また二人には名だたる茶人・数寄者・目利きたちとの交流があり、そのため貴重な茶道具や資料が集まったのである。

本展では蓬春の作品とコレクションより茶の湯のころを感じていただける作品をご鑑賞いただいた。中でも江戸時代の茶の湯を伝える珍しい絵巻である前田氏実模《宇治農手振》を紹介、あわせて若き日の蓬春が修学院離宮に取材した色濃い緑の美しい《緑庭》(昭和2年、第8回帝展特選)もご覧いただいた。蓬春邸にある新春にふさわしい茶の湯の世界をお楽しみいただいた。



チラシ
前田氏実模
《宇治農手振》(部分)
山口蓬春
《緑庭》
《白蓮木蓮》

■ 主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法
雛 画賛	与謝蕪村(1716-1784)	江戸時代(18世紀)	紙本着色
墨蹟 點	玉舟宗瑤(1610-1668)	江戸時代 寛文6年(1666)	紙本墨蹟
宇治農手振	前田氏実模	大正・昭和時代(20世紀)	紙本淡彩
緑庭	山口蓬春(1893-1971)	昭和2年(1927)	紙本着色
枇杷	山口蓬春	昭和31年(1956)	紙本着色
白蓮木蓮	山口蓬春	昭和32年(1957)	紙本着色
三彩小鉢	イラン・ニシャプール出土	9-10世紀頃	陶器
青磁象嵌荔枝菊花文鉢	朝鮮半島	高麗時代(12世紀)	磁器
色絵花卉文燭台	伊万里・柿右衛門様式	江戸時代(17世紀)	陶器
梅棗 庸軒好 一閑張	飛來一閑(1578-1657)	江戸時代(17世紀)	木、紙、漆
老松茶器 秋草蒔絵 銘「松風」	鐫木清方(1878-1972)画	昭和40年(1965)頃	木、漆

※出品作は全て当館所蔵。

■ 関連イベント

- 第52回 葉山特別見学会
日 時：2月16日(金) 9:30 - 14:30
場 所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館
参加人数：26名(応募者31名)
- 展示解説
日 時：2月17日(土) 14:00 - (約20分)
参加人数：16名
- 呈茶会
日 時：3月3日(土)、4日(日) 12:00 - 15:30
- 会 場：桔梗の間および茶の間
料 金：1席500円(お菓子付き、要別途入館料)
協 力：葉山町茶道連盟
参加人数：3日38名、4日39名
- ずし楽習塾コラボ企画講座
「風薫る葉山の自然の中で…新日本画の先駆者 山口蓬春・その美!」
日 時：3月17日(土) 13:00 - 15:00(12:45受付)
会 場：逗子市市民交流センター第2・3会議室
料 金：500円(資料代等)
講 師：当館学芸員
参加人数：64名

平成30年度

■ 春季企画展

百花繚乱 – 山口蓬春の心を魅了した花鳥の世界 –

平成30年4月14日(土)～6月10日(日)

| 後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

| 開館日数：50日

山口蓬春邸の庭は、様々な草木に彩られていたという。時に芳香を漂わせながら、季節ごとに咲き乱れる色とりどりの花。木々の間から覗く小鳥の姿とその愛おしいさえずり。庭に訪れる四季の移ろいを心待ちにしていた蓬春は、その機微を捉え、最も美しい自然の姿を写生し、自らの日本画のなかに描き留めた。

「以前は風景写生にもよく出かけましたが、年をとるとどうしても身辺取材が多くなって…それに長年親してきたものに熱意を感じて描くのがいいようですね。年々歳々花同じからずというのとおり、同じ花でもそのときどきで見方、感じ方も変わってくる。主題も年齢、経験が大きく影響するようです。」(『富山新聞夕刊』昭和40年[1965]6月14日)と語るように、特に葉山に転居してからの蓬春は身近な光景として花鳥画を描いた。近代以降、日本画において革新への模索が試みられ、西洋絵画の摂取が盛んに行われるなか、蓬春は伝統的な画題である花鳥画を中心に日本画の近代化を目指し、新日本画創造に向けて取り組んでいったといえる。

本展では、蓬春が描いた「百花繚乱」(色々な花が、華やかに美しく咲き乱れる、の意)の花鳥画を通じて蓬春の自然への恵愛の心とその想いを新日本画へと昇華させていく過程に迫った。



チラシ 山口蓬春《春》

■ 主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
都波喜	山口蓬春(1893-1971)	昭和26年(1951)頃	紙本着色	山口蓬春記念館
計志	山口蓬春	昭和25年(1950)	紙本着色	山口蓬春記念館
紫陽花	山口蓬春	昭和34年(1959)	紙本着色	山口蓬春記念館
夏影	山口蓬春	昭和38年(1963)	紙本着色	山口蓬春記念館
花菖蒲	山口蓬春	昭和37年(1962)	紙本着色	山口蓬春記念館
泰山木	山口蓬春	昭和14年(1939)	絹本着色	山口蓬春記念館
夏の花	山口蓬春	昭和45年(1970)	紙本着色	山口蓬春記念館
百合	山口蓬春	昭和32年(1957)	紙本着色	山口蓬春記念館
まり藻と花	山口蓬春	昭和30年(1955)	紙本着色	山口蓬春記念館
瓶花	山口蓬春	昭和40年(1965)	紙本着色	山口蓬春記念館
瓶花	山口蓬春	昭和36年(1961)	紙本着色	個人
春	山口蓬春	昭和37年(1962)	紙本着色	東京国立近代美術館
陽に展く	山口蓬春	昭和43年(1968)	紙本着色	宗教法人靈波之光
菊	山口蓬春	昭和34年(1959)	紙本着色	明治座

■ 関連イベント

● 展示解説

日 時：4月14日(土) 14:00 - (約20分)

参加人数：8名

● 第15回児童・生徒のための美術に親しむ教室

「岩絵具を使って日本画を描いてみよう」

日 時：平成30年5月3日(木・祝) 13:00 - 16:00

会 場：多目的室

講 師：高橋朋子(東京都立総合芸術高等学校美術科講師)

参加人数：25名(応募者28名)

● 「国際博物館の日」来館者プレゼント

日 時：5月18日(金)

● トークイベント「蓬春の花鳥画を植物学的な視点で見ると？」

日 時：5月27日(日) 14:00 - 15:00

会 場：多目的室および展示室

解 説 者：やがさき 矢ヶ崎朋樹(公益財団法人地球環境戦略研究機関 国際生態学センター 主任研究員)、倉持卓司(葉山しおさい博物館学芸員、当館学芸員)

参加人数：22名

● 呈茶会

日 時：6月2日(土)、3日(日) 12:00 - 15:30

会 場：旧画室

料 金：1席500円(お菓子付き、要別途入館料)

協 力：葉山町茶道連盟

参加人数：2日18名、3日20名

■ 夏季収蔵品展

山口蓬春といきもの - 自然を愛でるところ -

平成30年6月16日(土)～9月24日(月・祝) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前 期：6月16日(土)～7月22日(日)
【後 期：8月7日(火)～9月24日(月・祝)
【後 援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
【開館日数：75日

「花鳥画の、作品の優劣は、その作家の自然への愛の深さと、観察の力の如何とのみが決定的と謂っていい。」(山口蓬春「花鳥画を描く心」『邦画』4月号 昭和10年[1935])

日本画家・山口蓬春は、長きにわたる画業のなかで風景画や静物画、そして花鳥画など一つのジャンルにとらわれることなく、実に様々な主題に取り組んでいる。日本画の伝統的なやまと絵からはじまり、「蓬春モダニズム」と称された西欧近代絵画を彷彿させるモダンな作品、その画風は多岐にわたり、大正から昭和の日本画壇に大きな功績を遺した。そのなかでも花や鳥、小動物など『いきもの』を主題にした花鳥画は生涯を通じて最も描き続けたジャンルと言える。日常生活においても愛らしい花鳥をテーマにした古美術品に親しみつつ、愛犬をわが子同然にかわいがる蓬春。そんな彼の作品からは自然、そして生命への愛情に根ざした造形に対する深い理解を実感することができる。

本展では、蓬春の作品とより選った古美術品のコレクションより『いきもの』をテーマとして、日本画家・山口蓬春の魅力をあますことなくご紹介した。



チラシ

山口蓬春

《蛙との三ひょこへ扇面》(部分)
《河伯》(部分)
《春野》(部分)
《望郷 小下絵》(部分)
狩野探幽
《趙昌筆 瓜虫図 模写》(部分)
《加彩羊俑》
《古赤絵獅子唐草文平鉢》
《古染付イタチ文様中皿》(部分)

主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法
趙昌筆 瓜虫図 模写	狩野探幽(1602-1674) 模	江戸時代(17世紀)	絹本着色
河伯	山口蓬春(1893-1971)	不詳	紙本墨画淡彩
蛙との三ひょこへ	山口蓬春	不詳	紙本淡彩
春野	山口蓬春	昭和6年(1931)	絹本着色
佐与利	山口蓬春	昭和26年(1951)	紙本着色
望郷 小下絵	山口蓬春	昭和28年(1953)	紙本着色
山鳩 写生	山口蓬春	不詳	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩
加彩羊俑	中国	北魏時代(4-6世紀)	陶俑
古赤絵獅子唐草文平鉢	中国・景德鎮窯	明時代(16-17世紀)	磁器
古染付イタチ文様中皿	不詳	不詳	磁器

※出品作は全て当館所蔵。

関連イベント

- 展示解説
日 時：6月30日(土) 14:00 - (約20分)
参加人数：4名
- 第53回 葉山特別見学会
日 時：7月13日(金) 9:30 - 14:30
場 所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館
参加人数：23名(応募者24名)
- 夏休み親子鑑賞期間割引
期 間：8月7日(火)～31日(金)
- 葉山を巡るスタンプラリー
期 間：8月8日(水)～19日(日)
場 所：神奈川県立近代美術館 葉山・神奈川県立葉山公園・葉山しおさい博物館・はやま三ヶ岡山緑地・山口蓬春記念館
参加人数：15名

■ 秋季企画展

山口蓬春とやまと絵 - 初公開！《昭和御大典繪卷》を中心に -
平成30年9月29日(土)～11月25日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前期】9月29日(土)～10月28日(日)
【後期】10月30日(火)～11月25日(日)
【後援】神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
【開館日数】50日

山口蓬春(1893-1971)は、東京美術学校日本画科に学び、やまと絵の近代化を目指してその技法を基盤とした日本画の世界を展開した。その間、蓬春が手掛けたやまと絵のジャンルは、日本の古典文学、有職故実をふまえた人物画、歴史画、そして伝統的な名所絵にとらわれない風景画など多岐にわたっている。

この度、初公開となる《昭和御大典繪卷》(昭和3年[1928]、神奈川県立近代美術館 山口蓬春文庫蔵)は、蓬春をはじめ当時のやまと絵の名手たちが昭和天皇の「即位の礼」を描いたもので、やまと絵の魅力がふんだんに盛り込まれた一級品である。

本展では大正末から昭和初期に制作された若き蓬春の、澄みわたり穏やかで清新な画風を紹介した。さらにやまと絵に通じる四季というテーマをとおして、蓬春が生涯をかけて追求した新日本画の世界を感じていただいた。

併せて、蓬春コレクションからは日本中世以降、やまと絵の伝統を担った土佐派の筆による《十二月風俗図》(重要文化財)をご覧いただいた。



チラシ
山口蓬春《昭和御大典繪卷》

■ 主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
昭和御大典繪卷	山口蓬春(1893-1971)ほか	昭和3年(1928)	絹本着色	神奈川県立近代美術館 山口蓬春文庫
木場	山口蓬春	大正14年(1925)	絹本着色	山口蓬春記念館
緑庭	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色	山口蓬春記念館
仲麿 菅公	山口蓬春	昭和4-5年(1929-30)	絹本着色	一般財団法人野間文化財団
西行 芭蕉	山口蓬春	昭和4-5年(1929-30)	絹本着色	一般財団法人野間文化財団
人麿	松岡映丘(1881-1938)	昭和7年(1932)	絹本着色	一般財団法人野間文化財団
新冬	山口蓬春	昭和37年(1962)	紙本着色	山口蓬春記念館

■ 関連イベント

● 展示解説

日時：10月8日(月・祝) 11:00 - (約20分)
参加人数：10名

● 邸園ツアー

日時：11月3日(土・祝)
①11:00 - 11:40 ②13:00 - 13:40

会場：本館および庭園

参加人数：①16名、②12名

● 第54回 葉山特別見学会

日時：11月16日(金) 9:30 - 14:30

場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館

参加人数：34名(応募者71名)

■ 初冬収蔵品展

洋画から新日本画へ - 山口蓬春の飽くなき挑戦 -

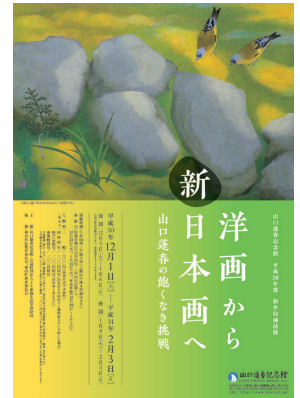
平成30年12月1日(土)～平成31年2月3日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前 期：12月1日(土)～1月6日(日)
 【後 期：1月8日(火)～2月3日(日)
 【後 援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
 【開館日数：50日

日本画家・山口蓬春(1893-1971)の画業^{かえり}を顧みるとき、ひととき特徴的なのは、本格的に油彩画を学んだ後に日本画家になったということだろう。少年の頃より水彩画に熱中し、白馬会絵画研究所で油彩画を学んでいた蓬春は、東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科に入学、在学中にその才能を開花させる。しかし、自身の日本画への可能性を見出した蓬春は、改めて日本画科へ転科、首席で卒業したときには30歳になっていた。その後、日本画家としての頂点を極めた蓬春だったが、「はじめ日本画をやっているときは、油絵の技法というものがどうもじゃまになりましたね。それに当時は印象派がはいつてきたときですがね、観察方法から画題の選び方までずいぶんなやみました。」(『サンケイ新聞夕刊』昭和40年[1965]12月14日)と語るように、その道のりは平坦ではなかった。しかし、自らの芸術に真摯に向き合い、あらゆる美の知識を貪欲に吸収しながら、たゆみない努力を続け、ついに蓬春は、自らの目指すものとしてこれまでにない「新日本画」の創造に到達する。そして晩年に至り、「油絵と日本画はそもそも絵の具がちがう。その絵の具を使って日本画は装飾性を発達させてきたし洋画は写実を追究してきた。(中略)日本画の顔料が持つ特殊性これを生かさないと。」(『富山新聞夕刊』昭和40年[1965]6月14日)と語る言葉には、油彩画と日本画という二つの世界を知り、その狭間で苦悩したからこそ得られた本質への深い理解があり、そのことが「新日本画」創造への原動力となったともいえるだろう。

蓬春は、若かりし頃に描いた油彩画を戦時中も手放さず生涯大切に所持していた。そこには蓬春のどんな想いが託され、それらの油彩画は私たちに何を伝えてくれるのか――。

蓬春芸術の出発点ともいえる油彩画と戦前戦後を通じた日本画を一堂に会し、通観することで「新日本画」に込められた蓬春の世界観とその魅力を探った。



チラシ
山口蓬春《洩るゝ陽》

■ 主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法
表：風景 裏：黄色を主体とした塗り	山口三郎(蓬春)(1893-1971)	大正元年(1912)	カンヴァスボード、油彩/額装
表：路面電車 裏：肖像	山口三郎(蓬春)	大正3年(1914)	板、油彩/額装
表：風景 裏：静物	山口三郎(蓬春)	大正元年(1912)頃	板、油彩/額装
小径(印象派風)	山口三郎(蓬春)	大正元年(1912)頃	カンヴァスボード、油彩/額装
窓辺の静物	山口三郎(蓬春)	大正元年(1912)頃	カンヴァスボード、油彩/額装
表：街の風景 裏：菊	山口三郎(蓬春)	大正元年(1912)頃	板、油彩/額装
表：瓶花 裏：静物	山口三郎(蓬春)	大正元年(1912)頃	板、油彩/額装
表：瓶花 裏：肖像	山口三郎(蓬春)	大正元年(1912)頃	板、油彩/額装
女の肖像	山口三郎(蓬春)	大正元年(1912)頃	板、油彩/額装
ニコライ堂	山口三郎(蓬春)	大正5年(1916)	板、油彩/額装

※出品作は全て当館所蔵。

■ 関連イベント

- 鎌倉市鍋木清方記念美術館との連携イベント
 期 間：平成30年12月1日(土)～平成31年2月24日(日)
 ① ワークシート「鍋木清方と山口蓬春-吉田五十八建築にみる日本画家の画室」配布
 ② トークイベント「蓬春と清方と五十八」
 日 時：1月5日(土) 13:30-14:00
 会 場：鎌倉市鍋木清方記念美術館
 ゲ ス ト：当館学芸員 参加人数：39名
 ③ トークイベント「大正期の画壇と清方と蓬春」
 日 時：1月13日(日) 13:30-14:00
 会 場：多目的室
 ゲ ス ト：今西彩子(鎌倉市鍋木清方記念美術館学芸員)
 参加人数：11名

- 邸園ツアー
 日 時：12月8日(土) 11:00-11:40
 会 場：本館および庭園 参加人数：10名
- スペシャルトーク「修復の現場から～蓬春の油彩画からわかること～」
 日 時：12月9日(日) 14:00-15:00
 会 場：多目的室および展示室
 解 説 者：森直義氏(修復家・森絵画保存修復工房代表)、当館学芸員
 参加人数：15名
- 展示解説
 日 時：2月3日(日) 11:00-(約20分)
 参加人数：6名

■ 新春収蔵品展

山口蓬春・アートディレクターの世界

平成31年2月11日(月・祝)～4月7日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

- 【前 期：2月11日(月・祝)～3月10日(日)
- 【後 期：3月12日(火)～4月7日(日)
- 【後 援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
- 【開館日数：49日

山口蓬春(1893-1971)は、その多岐に亘る画業の中で常に新日本画の創造をめざし邁進し続けている。画壇のなかで早くから活躍する一方で、その人間味に溢れた蓬春のもとには、様々な分野を超えて多くの文化人が集まった。そして、彼らとの交流を通じて深い美を追求する蓬春の活動は、より幅広く展開している。それは、本の装丁をはじめ切手の図案、歌舞伎の美術監修や衣装図案、緞帳原画の制作など、内容に適したデザインを凝らし、華やかな演出を施すなど、蓬春は画の制作だけではなく、いわばアートディレクターとしても活躍したのであった。そして、昭和43年(1968)には、画業の集大成ともいえる皇居新宮殿の杉戸絵を完成させている。

日本画の装飾性とデザインは、似て非なるものではあるが、様々な芸術の分野に共通するエッセンスを多分に含んだ表現であるとも考えられる。本展では、蓬春の手掛けた装丁・図案の仕事などに注目するとともに、文化人たちとの交流の跡が偲ばれる作品も併せて紹介した。



チラシ
山口蓬春
《紅梅 扇面》
《蘭 扇面》
《松 扇面》

主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
望郷 小下図	山口蓬春(1893-1971)	昭和28年(1953)	紙本着色	個人
紅梅 扇面	山口蓬春	不詳	紙本着色	個人
蘭 扇面	山口蓬春	不詳	紙本着色	個人
松 扇面	山口蓬春	不詳	紙本着色	個人
新冬	山口蓬春	昭和37年(1962)	紙本着色	山口蓬春記念館
蓬春装丁『春宵鳥譚』	内田清之助/桜井書店	昭和17年(1942)	書籍	山口蓬春記念館
蓬春装丁『杏っ子』	室生犀星/新潮社	昭和32年(1957)	書籍	山口蓬春記念館
蓬春装丁 『花柳章太郎帰朝 新派初春公演』	株式会社明治座	昭和34年(1959)	冊子	山口蓬春記念館
蓬春装丁 『四世中村雀右衛門襲名大歌舞伎』	松竹株式会社演劇部	昭和39年(1964)	冊子	山口蓬春記念館
蓬春装丁『前進座十二月興行』	前進座	昭和39年(1964)	冊子	山口蓬春記念館

関連イベント

● 展示解説

日 時：2月17日(日) 14:00 - (約20分)
参加人数：6名

● 呈茶会

日 時：3月2日(土)、3日(日) 12:30 - 15:30
会 場：桔梗の間および茶の間
料 金：1席500円(お菓子付き、要別途入館料)
協 力：葉山町茶道連盟
参加人数：2日20名、3日17名

Ⅱ. 収蔵品修復(東洋絵画)

笠 理 砂

平成29年度

当館収蔵作品・山口蓬春《瓶花》(大正12年 [1923])の軸画面には、経年変化による強い折れが生じており、鑑賞等を妨げるのみならず、今後折れの進行によっては絵具の剥落を誘発する事が懸念されることから、修理作業を行った。

1. 作業期間 平成29年8月から平成29年12月
2. 委託業者 有限会社 目黒黄鶴堂
3. 委託作品 作品名：《瓶花》(紫陽花) 大正12年(1923) 紙本着色／軸装
本紙：128.2×32.2 外寸(表装)：202.2×44.1
4. 修理概要 本紙折れを修理、表面のシミを除去、表具を新調

平成30年度

山口蓬春コレクションのうち、中国・明時代の花鳥画として蓬春が自らの作品の参考にした呂紀《白鷺図》(明時代 [15-16世紀])の画面一部に細かなカビの発生を確認したことから、カビの除去を実施した。また新興大和絵会時代以降、有職故実の研究のために蓬春がやまと絵の手本とした土佐光起筆《人麿朝臣之図》(江戸時代 [17世紀])の絵画部分・表装部分に、経年による損傷を確認したことからこれを修理し、展示可能で良好な状態に戻すための修理を実施した。

1. 作業期間 平成31年1月から平成31年3月
2. 委託業者 有限会社 目黒黄鶴堂
3. 委託作品 (1) 呂紀《白鷺図》(明時代 [15-16世紀]) 寸法：163.0×105.5cm
(2) 土佐光起筆《人麿朝臣之図》(江戸時代 [17世紀]) 寸法：95.6×26.0 cm
4. 修理概要 (1) 絵画部分のカビを除去し、消毒・乾燥した。
(2) 絵画部分・表装部分の横折れと虫食い穴を修理し、太巻きと箱を新調した。

Ⅲ. 収蔵品修復(油彩画)

岡田 修子

平成30年度

作業期間：平成30年6月22日～10月24日

委託業者：森絵画保存修復工房

委託作品及び修理概要：下記「油彩画作品一覧（以降作品一覧）」参照

作品概要：

当館には、蓬春が所持していた油彩画11点が遺されていた。そのうちの1点は、昭和5年(1930)に蓬春とともに、六潮会のメンバーであった中川紀元の子孫の作品であり、蓬春の父親の遺影を描いた作品となっている【作品一覧⑩】。その他10点の油彩画は両面に描かれているものが殆どであり、それらを含めると全17面の作品となっている。

そのなかで、蓬春の本名である「山口三郎」の署名があり、制作年が特定できる作品が3点ある。一番早い作品は、蓬春が東京美術学校へ入学する前、葵橋洋画研究所(明治44年[1911]3月まで白馬会絵画研究所)へ通っていた時期である大正元年(1912)【作品一覧①】と、一年志願兵として入隊・除隊後、東京美術学校進学への準備を始めた大正3年(1914)【作品一覧②】、そして東京美術学校入学してから1年後の大正5年(1916)【作品一覧③】となっている。また、蓬春(三郎)作ではないと思われる「MINORU」と署名がある作品1点【作品一覧⑩】も含まれている。

今回の修復では、各作品の筆跡や描き方が大きく異なっていることが確認できており、これらの油彩画全てを蓬春が描いたとすれば、様々な技法や表現に挑戦していたと推測することもできる。一方で、あまりに多彩な描き方である点、「MINORU」と署名がある作品もあることなどから、蓬春が自作以外の作品を研鑽の材料としてなのか、所持していた可能性も考えられる。

蓬春は、東京美術学校西洋画科時代、大正5年(1916)、大正6年(1917)と二科展に出品し、入選を果たしていた。それら蓬春の基準作といえる油彩画と比較すれば、当館で所蔵する油彩画の作者についてもある程度、推測することはできるかもしれない。しかし、それらの作品は、現存の有無を含めて確認することはできず、現段階では、蓬春の自作なのか、そうでないのかをはっきり言及することは差し控えたい。

何れにしても蓬春は、戦前から戦後にかけて疎開を含め、転居を繰り返すなかで、これらの油彩画を手放すことなく終焉の地・葉山まで持ち込み、大切に所持していたのは事実であり、これらの油彩画に対する蓬春の深い愛着を感じずにはいられない。

なお、額については、《ニコライ堂》(大正5年[1916])【作品一覧③】のみ、蓬春が所持していた当時からのもので、その他は板のまま保管されていたものを当館で額装した。

油彩画作品一覧


山口三郎(蓬春)作

主 題	①(表)風景 (裏)黄色を主とした塗り	②(表)路面電車 (裏)肖像	③ニコライ堂	④小徑(印象派風)
画 像				
縦 × 横	13.8 × 22.5 (cm)	22.2 × 15.6 (cm)	33.1 × 23.6 (cm)	32.8 × 23.8 (cm)
技 法	油彩/板	油彩/板	油彩/板	油彩/カンヴァスボード
制作年	1912年(大正元年)	1914年(大正3年)	1916年(大正5年)	1912年(大正元年)頃
署 名	《風景》 面の右下に「1912 S.YAMAGUCHI」	《路面電車》右下「1914. 12- S.Y」	左下に「S.Y. 1916 □□ril」 (□□は削れており読み取れない)	なし
修復処置	1. 洗浄 2. 充填・補彩	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 充填・補彩 4. 額改良	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 充填・補彩 4. 額の改良	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 補彩 4. 額改良

山口三郎（蓬春）作

主 題	⑤窓辺の静物	⑥女の肖像	⑦(表)風景 (裏)静物	⑧(表)瓶花 (裏)肖像
画 像				
縦 × 横	23.3 × 29.5 (cm)	22.1 × 14.0 (cm)	32.9 × 23.1 (cm)	21.2 × 13.9 (cm)
技 法	油彩／カンヴァスボード	油彩／板	油彩／板	油彩／板
制作年	1912年（大正元年）頃	1912年（大正元年）頃	1912年（大正元年）頃	1912年（大正元年）頃
署名	なし	なし	なし	なし
修復処置	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 額改良	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 補彩 4. 額改良	1. 洗浄 2. 充填・補彩	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 充填・補彩

主 題 ⑨(表)菊 (裏)街の風景

画 像		⑩(表)瓶花 (裏)静物	
縦 × 横	22.6 × 14.1 (cm)	22.4 × 14.0 (cm)	
技 法	油彩／板	油彩／板	
制作年	1912年（大正元年）頃	1912年（大正元年）頃	
署名	なし	瓶花の面の左下に「MINORU」	
修復処置	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 充填・補彩	1. 剥離留め 2. 洗浄 3. 充填・補彩	

中川紀元 作

主 題 ⑪山口慶治先生御遺影

画 像	
縦 × 横	53.0 × 40.8 (cm)
技 法	油彩／画布
制作年	不詳
署名	画面右端 「蓬春画伯先考山口慶治先生壮年御遺影」
修復処置	1. 洗浄 2. 補彩 3. ワニスの塗布 4. タックスのサビ除去とサビ止め 5. 額の改良

IV. 収蔵品保存対策

平成27年度(2015)より継続している環境調査および、除塵防黴施工を実施するとともに、一部の収蔵美術品は、作品の状態を確認したのちビニール被覆燻蒸を実施した。

	平成30年度	平成29年度
環境調査		
調査年月日	平成30年7月19日～8月17日	平成29年6月9日～7月13日
施工場所	展示室1～3、収蔵庫、書庫	展示室1～3、収蔵庫、書庫
施工業者	株式会社フミテック	株式会社フミテック
調査方法	昆虫生息調査	昆虫生息調査
	付着菌調査	付着菌調査
	空中菌調査	空中菌調査
	酸・アルカリ検査	酸・アルカリ検査
使用機器名	付着菌調査 : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地	付着菌調査 : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地
	空中浮遊菌調査 : MERCK社 MAS100ECO エアースンプラー : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地	空中浮遊菌調査 : MERCK社 MAS100ECO エアースンプラー : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地
	浮遊粉塵量調査 : 柴田科学器機械工業(株) デジタル粉塵計 P-5H2型	浮遊粉塵量調査 : 柴田科学器機械工業(株) デジタル粉塵計 P-5H2型
	温・湿度調査 : (有)東京吉野計器 アスマン式乾湿球温度計 SS-3BM	温・湿度調査 : (有)東京吉野計器 アスマン式乾湿球温度計 SS-3BM
ガス燻蒸施工		
施工年月日	平成30年7月25日～31日	平成29年8月1日～4日
施工場所	展示室2	展示室2
施工業者	株式会社フミテック	株式会社フミテック
施工対象物	軸物、墨、紙資料等	軸物、絵画等
施工目的	殺虫、殺卵、殺菌	殺虫、殺卵、殺菌
施工方法	ビニール被覆燻蒸	ビニール被覆燻蒸
使用薬剤	エキヒュームS	エキヒュームS
除塵防黴施工		
施工年月日	平成31年2月8日、9日	平成30年2月7日、3月5日、6日
施工場所	展示室1及び収蔵庫、書庫	展示室1～3、収蔵庫、書庫
施工業者	株式会社フミテック	株式会社フミテック
施工目的	除塵防黴	除塵防黴
使用資材	テックリンウェット (防黴用ウェットタオル) テックリンドライ (除塵用ドライクロス)	テックリンウェット (防黴用ウェットタオル) テックリンドライ (除塵用ドライクロス)

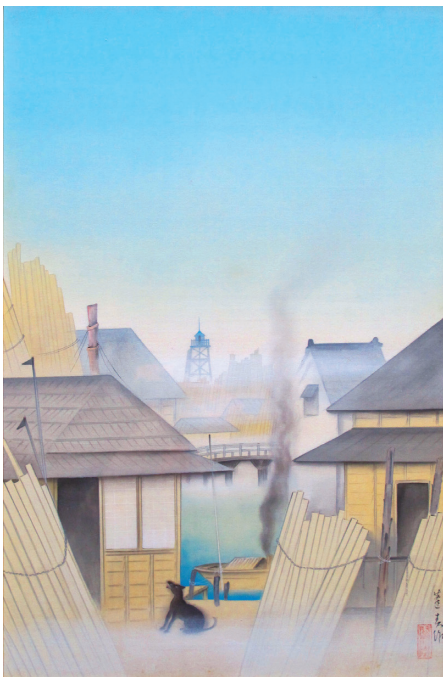
V. 新収蔵品

平成 29 年度

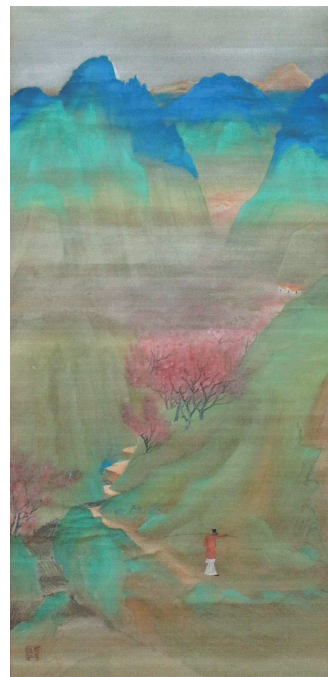


《緑庭》
昭和2年(1927)
絹本着色 軸装
194.5 × 165.5
第8回帝展

平成 30 年度



《木場》
大正14年(1925)
絹本着色 額装
57.5 × 36.2
第5回新興大和絵会展
同人合作「東都近郊十二景」のうち



《武陵桃源》
昭和2年(1927)
絹本着色 軸装
115.8 × 57.3
第7回新興大和絵会展

VI. 収蔵資料の電子データ化

吉田 敬

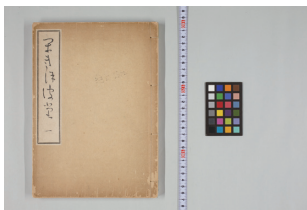
山口蓬春記念館では、山口家から寄贈及び、遺贈された美術品や資料などを多数収蔵している。それらの資料のなかには、蓬春による作品記録帖と写真資料が含まれている。本稿では、平成29年度及び平成30年度の事業計画に基づき、この作品記録帖と写真資料を、未来永劫安全に保管しつつ、活用の効率化を図るために、2か年に亘りデジタル撮影による電子データ化を実施したことについて報告する。

1. 平成29年度

- [撮影媒体] 作品記録帖（「閑起津波堂」及び「縮図帖」）
- [撮影内容] デジタル撮影 2,200万画素 TIFEデータ及びJPEGデータ
基本的には、画帖を見開き状態にて撮影し、白紙ページは割愛した。また、ページの間に挟まっている付属的な資料や重ねたり折り込まれて貼り付けてあるものなども個々に撮影した。
- [撮影総数] 1,483点（内訳：「閑起津波堂」369、「縮図帖」1,114）
- [委託業者] 株式会社DNPアートコミュニケーションズ

●「閑起津波堂」及び「縮図帖」について

「閑起津波堂」及び「縮図帖」は、作品名、制作年月日、寸法、材質、譲渡先や出品展名、箱書き・シール・落款などの作品情報が綴られており、岩絵具で彩色された図柄が描かれている場合が多い。なお、名称については、画帖の表紙に記されている「閑起津波堂」及び「縮図帖」をそれぞれ採用した。ただし、一部記入の無いものや「かきつ者」多「かきつばた」「縮図帳」「作品記録」などの名称が記されているものも見受けられる。「閑起津波堂」は鑑定記録的要素が強く全9帖あり、「縮図帖」は制作記録的なもので占められ全35帖ある。どちらも作品の詳細を記録していることから、現在まで山口蓬春の作品鑑定の一助としても活用されており、蓬春の半世紀近くに及ぶ創作活動の縮図を見て取ることができる大変貴重な資料となっている。



閑起津波堂(一)



縮図帖(昭和32年)



〈掲載例〉



縮図帖(昭和31年)より



山口蓬春《枇杷》
昭和31年(1956)
山口蓬春記念館蔵



縮図帖(昭和40年)より



山口蓬春《瓶花》
昭和40年(1965)
山口蓬春記念館蔵

2. 平成30年度

〔撮影媒体〕 写真資料

〔撮影内容〕 デジタル撮影 2,200万画素 TIFEデータ及びJPEGデータ

基本的には、表面のみを撮影し、裏面は何か記載等がある場合のみ撮影した。

〔撮影総数〕 3,037点

〔委託業者〕 株式会社DNPアートコミュニケーションズ

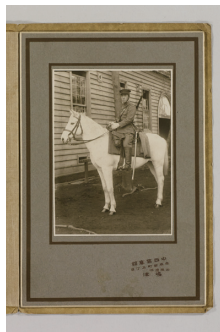
●写真資料について

写真資料の内容は、最も古いもので明治30年(1897)撮影のものから、蓬春の死後、春子夫人周辺のものまで実に様々である。撮影者は蓬春とゆかりのある人物によるものと思われるが、なかには蓬春自身によるものや雑誌社の取材時の撮影なども含まれる。これらの写真資料は、先行資料である『山口蓬春日記(山口蓬春記念館研究紀要別冊)』と照らし合わせることで、蓬春の画業や暮らしぶりを垣間見ることができるだけでなく、当時の風俗も記録した大変貴重な研究材料の一つである。

〈撮影した写真資料より〉



明治30年(1897)8月
北海道札幌の写真館にて
左から
兄・篤郎、父・慶治、三郎(蓬春)4歳



大正3年(1914)11月
前年12月に一年志願兵として入隊し、
輜重兵第一大隊を除隊



大正15/昭和元年(1926)12月
女流画家であった齋藤春子と結婚



昭和3年(1928)4月
第8回新興大和絵会展において
後列左から穴山義平、狩野光雅、蓬春、
高木保之助
前列左端 松岡映丘



昭和5年(1930)に結成した「六潮会」
の仲間と熱海清快楼古屋旅館にて
左端に立つのが蓬春
上から 横川毅一郎、中川紀元、福田
平八郎、牧野虎雄(右)、木村
莊八、中村岳陵、外狩素心庵



昭和12年(1937)1月
信州山田温泉にて
スキーを楽しむ蓬春(右)と
春子夫人(左奥)

VII. 刊行物の発行(平成29～30年度)

■ 山口蓬春作品集『山口蓬春-新日本画の世界-』

発行時期：平成30年2月

掲載内容：図版60点、作品解説、年譜、文献目録、作品目録



■ 小冊子『山口蓬春が愛した古陶磁-描かれた数々の器-』

発行時期：平成30年10月 改訂版

掲載内容：山口蓬春と古陶磁、三彩、磁州窯、染付、赤絵、蓬春と唐三彩、古九谷、蓬春コレクションと古陶磁



■ 小冊子『山口蓬春コレクション 重要文化財 十二ヶ月風俗図』

発行時期：平成30年10月 改訂版

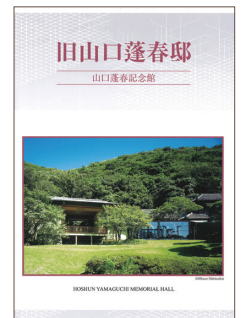
掲載内容：山口蓬春コレクション、十二ヶ月風俗図のあらまし、十二ヶ月風俗図全図版、十二ヶ月風俗図・月々のプロフィール



■ 小冊子『旧山口蓬春邸-山口蓬春記念館-』

発行時期：平成30年10月 改訂版

掲載内容：山口蓬春邸から山口蓬春記念館へ、山口蓬春記念館平面図(開館時)、旧山口蓬春邸平面図、2階座敷(旧画室)、吉田五十八設計による画室、吉田五十八設計によるそのほかの増改築(一部非公開)、山口蓬春・吉田五十八略年譜



■ 『山口蓬春記念館研究紀要』第9号

発行時期：平成31年3月

掲載内容：エッセイ「清方との繋りで想い出す蓬春先生」／根本章雄、《昭和御大典繪巻》(神奈川県立近代美術館 山口蓬春文庫蔵) -その図様の注解と合作絵巻制作の背景について-／笠理砂、蓬春研究ノート(9) 山口蓬春が描いた緞帳原画について／岡田修子、《望郷》について／吉田敬、平成29年度 記念館収蔵庫新設工事 概要／加藤慶輝



山口蓬春記念館 年報 第一号

令和元年6月

編集・発行 山口蓬春記念館
〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2320
電話 046-875-6094
制作 株式会社 野毛印刷社

HOSHUN YAMAGUCHI MEMORIAL HALL ©2019